

真声会大阪

発行：京都市立芸術大学音楽学部同窓会 真声会大阪支部
事務局：〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里4-12-25 樋口博行 方
Tel/Fax 06-6624-3425
郵便振替口座 00960-4-47824
<http://senri-music.com/shinseikai-osaka/>

新年を寿ぎ、次のステップに向けて思うこと

真声会大阪支部、支部長
大村 益雄（1期、作曲）

あけましておめでとうございます。お健やかに新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。本年もよろしく願い申し上げます。

経済的にはそれほど恵まれていない、アフリカや、東南アジアや、南アメリカの、多くの国々を実際に訪れ、それぞれの民族の心の温かさを胸に強く感じて、日本に帰ってくると、いつもホッとします。海外の国々では、厳しい生活環境の中にも、人々の強い意志と心の温もりを感じますが、日本では、終戦後に見られた衣食住の厳しさは、すでに昔のこととなり、今では、穏やかで、安全で、思いやりの深い国になりました。地震や津波が起きても略奪などの暴動は起きません。お年寄りや体の不自由な人に、電車やバスの中で、席を譲っている若者が増えてきたような気がします。官公庁の受付も丁寧になりました。街で買い物をして、やり過ぎではないかと思うぐらい、とても親切です。

一方、世界の政治情勢は、近年、つとに厳しさが増してきています。シリアやスーダンにおける内戦のほか、近隣国の中国や韓国と日本との信頼関係も良くありません。原因の多くは、その国の内政事情にあると思いますが、それとて他人ごとではありません。

日本の政治においても、秘密保護法が成立し、首相の靖国参拝が問題提起されるなど、戦前、戦時中の緊迫した社会世相を思い起します。今の日本人は、もっと豊かな心を持っているはずで、温厚な振る舞いの中に、不測の事態に備えた配慮をしながら、国家間の交流を大切に、物事を着実に解決していく道を辿らねばならないと感じています。

交流といえば、真声会の本部活動として、去る11月27日（水）に、京都市内のレストラン、ウイズユーにて、美術学部同窓会と、音楽学部同窓会との「交流会」を行いました。美術学部は、上村淳之同窓会会長と、お二人の副会長をはじめ、学内代表幹事、学外代表幹事が出席され、音楽学部は、私、真声会会長と、大西多恵子副会長、松本真理子副会長、朴実編集委員長、三井ツヤ子理事、佐藤敏子会計役員、が出席いたしました。

京芸内は、美術と音楽という二つの学部に分かれています。が、このような交流のための会合が今まで一度も持たれてい

なかったことが不思議なぐらいです。共に親しく、打ち解けて意見交換をすることができました。いわば、京芸発展のための、歴史的な会合になったと言うことができます。そして、両同窓会は、設立経過や歴史の違い、それぞれの活動の独自性を互いに尊重しながら、京都芸大の発展に寄与するために、お互いに協力していくことなど、5つの事項について合意しました。詳しくは、京都芸大ホームページをご参照ください。
(<http://www.kcua.ac.jp/information/?mp=37854>)

大阪支部の活動としては、去る9月29日（日）に、第10回記念プリリアント・コンサート行い、第12期卒業生から、第53期卒業生までの幅広い年齢層の出演者により、バラエティーに富んだ演奏が行われ、大変盛況の内に終えることができました。また、今回で、大阪支部会報も第100号を迎えることになりました。真声会大阪支部は、縦に、横に、同窓の固い絆で結ばれ、特に、縦糸がうまく繋がっていることが何より嬉しいことです。これらの活動は、多くの方々の長年に亘る積み上げの成果であり、世話役、役員の方々、支部会員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

今後の課題としては、クラシック音楽の楽壇に内在している大きな問題点があります。明治以来、上流階級の人々の教養音楽として西洋より移入されたクラシック音楽は、ようやく100年余りを経過して、一般社会の人々に普及してきました。クラシックの演奏会も随分多く催されるようになりました。しかし、音楽を楽しんで聴きに來ていただく聴衆が育ってきているのだろうか、それらの聴衆によって、本当に、クラシック音楽が支えられているのだろうか、が疑問なのです。音楽レッスンや、音楽コンクールによって、クラシックの音楽をいつまでも支えることはできません。自然な音楽の成り立ち方へと移行して行かねばなりません。音楽をエンジョイし、自ら音楽を評価できる、健全な聴衆の更なる増加が必要なのです。

聴衆の育成を促進する音楽教育のあり方に意を注ぎ、他の芸術ジャンルの活動家とも積極的に交流し、話し合いを深めて、具体的な活動を起こしていくことこそが、次のステップとして大切なことだと思われるのです。

ブリリアント・コンサート 2013 報告

「ブリリアント・コンサート 2013」
を終えて

大阪支部の大プロジェクトとして臨んだ、第10回記念「ブリリアント・コンサート 2013」が、9月29日(日)いずみホールにて開催されました。当日は好天に恵まれ、心配された入場者も座席数の7割を超える600名余りの大盛況で成功裡に終えることができました。

会場には懐かしい顔がたくさん見られ、若い同窓生や現役の学生たちも駆けつけて舞台裏を支えてくれました。

プログラムはバラエティに富んだ内容で、温かい拍手に迎えられた第12期生から第53期生の幅広い出演者たちは、進行役の中島慈子さんに導かれて、スリリングな、また時に親密感に溢れた味わい深いステージを次々に繰り広げていただきました。

来場の皆さんから寄せられたアンケートでは、来たきっかけに「以前、真声会の演奏会を聴いて良かったから」から始まって、「全体構成がよかった」「いろんなジャンルの音楽でとても楽しい素晴らしいコンサートでした」「ホールも演奏も、心温まる素晴らしい演奏会であった」「さすが！の演奏でした」など、ほかにそれぞれの出演者に当てた賛辞も多く寄せられていて、10回記念の同窓会にふさわしい京芸ならではの内容の濃いコンサートだったのではないのでしょうか。

終演後の楽屋出口周辺は出演者と同窓生や関係者で賑わい、去りがたい気持ちでホールを後にしました。

本番の緊張から解放された打ち上げは大いに盛り上がり、出演者の個性豊かなリレースピーチは、なにわのノリ最高潮に達し、爆笑ありまた感極まって涙あり、世代を越えて学び舎を共にしていたことを再確認できた感慨深いひとときになったと思います。

出演者の皆様お疲れ様でした、そしてご来聴下さった方々、コンサートに賛同して協力いただいた方々、本当にありがとうございました。

盛會に終わったコンサートではありましたが、過程においては紆余曲折あり、運営資金、集客面などまだまだ反省、改善点が多々あります。コンサート決算は、まだ完全に終わっていませんが、かつてない多くの参加・賛同をいただいて、経常会計からの出資は12万余円と当初予算より少なく済む見込みです。皆様のご協力のおかげです。ありがとうございました。

今回のコンサートを機にまた一歩進んだ展開を生み出せば良いなと思っております。時代の風を読みながら大阪支部も進化していきたいものです。

大富榮里子

(28期 pf、副支部長・コンサート実行委員長)

プログラムと写真を掲載します。カラーでないのが残念です。

皆さんそれぞれに見事なお衣裳でした。

写真撮影は、佐々木卓男氏です。

(当日のプログラムには、卒業期は記載されていません。)

Trio

平井好子 (25期 ob)・蒲生絢子 (49期 hn)・名畑ゆかり (23期 pf)

C. ライネッケ：オーボエ、ホルン、ピアノのためのトリオ イ短調 op.188



Piano

岩井理沙 (53期)

F. ショパン：バラード第4番 へ短調 op.52



Vocal

柴田千恵子 (18期 sop)・大富榮里子 (28期 pf)・木村直子 (25期 vn)

平井康三郎：ゆりかご (詩も)、ふるさとの (石川啄木詩)、

うぬぼれ鏡 (小黒恵子詩) 小林秀雄：落葉松 (野上彰詩)



ブリリアント・コンサート 2013 報告

Piano

樋上眞生 (51期)

I.F. ストラヴィンスキー：ペトルーシユカからの3楽章



Piano duo

蜂谷葉子・大岡真紀子 (共に 29期)

M. ラヴェル：「スペイン狂詩曲」から「ハバネラ」、「ラ・ヴァルス」



Vocal

森池日佐子 (18期 m.sop)・樋上眞生 (51期 pf)

高山惇 (17期作曲)：歌曲集「じゅうにつき」(谷川俊太郎詩)から
“ろくがつ” “しちがつ” “にがつ” “さんがつ” “ごがつ”

Vocal

中林節子 (12期 m.sop)・大岡真紀子 (29期 pf)

A. ドヴォルザーク：「ジプシーの歌」 op.55, B.104



Quintet

佐々由佳里 (30期 pf)・木村直子 (25期 vn)

山口規子 (30期 vn)・小崎恵理子 (30期 va)・清水潔子 (30期 vc)

A. ドヴォルザーク：ピアノ五重奏曲 第2番 イ長調 op.81, B.155 から 第2,3,4楽章



ナビゲーター

中島慈子 (10期 sop)

入場料 (前売・当日)：¥3,000. (一般) / ¥1,500. (学生)

(マネジメント/さのまゆみ音楽事務所 06-6131-7901 / 090-3969-1499)

*協賛/㈱国際楽器社・新響株式会社・㈱ドルチェ楽器・三木楽器株式会社

ブリリアント・コンサート 2013 報告

(当日プログラムの巻頭あいさつ文を掲載します)

ブリリアント・コンサート 2013 について
ご挨拶

本日は、「ブリリアント・コンサート 2013」にお越しいただき、まことにありがとうございます。

昨年、京都市立芸術大学音楽学部が創設されて 60 周年を迎えました。京都を中心に数多くの演奏会、記念行事が開かれ、また、京都芸大と東京藝大のオーケストラが東京にて交換演奏会を行い、実りある記念年となりました。

卒業生は、ようやく 3,000 名を超えたところで、中には、親子、孫の 3 世代にわたって京芸の卒業生というほほ笑ましい家族も少なくありません。他の音楽大学に比べると卒業生の数は極めて少なく、「少数精鋭」という言われ方もしますが、今では、国内外のあらゆる分野で多くの卒業生が活躍し、「京芸」の名は内外で認められています。

卒業生の組織である音楽学部同窓会「真声会」は、第 1 期生の卒業と同時期の 1954 年に誕生しました。

真声会大阪支部は 27 年前に発足して、大阪を中心に活動する有志 250 名余で組織しており、地域でナマの音楽の良さを広めるために「プロムナード・コンサート」と称して、40 回開催してきました。また、2001 年からは、後輩たちのために「フレッシュ・コンサート」と名づけた中央での公演を 5 回開催し、その後は、社会的に幅広く活躍している会員にも出演を呼びかけ、「ブリリアント・コンサート」とタイトルして続けてきたことが、今回で、数えて第 10 回目となりました。

今回は、10 回記念として、早くから、世話役会の中に実行委員会を作り、委員長の大富栄里子さんを中心に検討を重ねていただきました。少し欲張った企画となりましたが、バラエティに富んだ内容と第 12 期生から第 53 期生という幅広い卒業生が同じステージで刺激し合うというスリリングな面もある半面、同じ学び舎で音楽に勤しんだという共通点をどこかで見出していただけるのではないかと思います。

また、広報・宣伝の強化、連携を図るために、「さのまゆみ音楽事務所」にマネジメントをお願いしました。代表の佐野真弓さんは、大阪教育大ご出身のピアニストですが、かつてこのコンサートに伴奏者としてご出演いただいた、縁のある方です。ご協力をいただいたことに御礼を申し上げます。

今日の演奏会を主催している真声会大阪支部は、先輩と後輩の交流を深め、お互いに協力しながら、今後も積極的に社会への音楽活動を行って参ります。

本日、ご多忙にも関わりませずご来聴下さいましたすべての皆様がたと、本演奏会の開催に当たり、多大なお力添えを賜りました関係各社、関係者に、深く感謝とお礼を申し上げます。

そして、今後とも京都市立芸術大学に対して、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

京都市立芸術大学音楽学部同窓会 真声会大阪支部
支部長 大村 益雄



ブリリアント・コンサート 2013 報告

出演者からのひとこと

溢れる拍手に押されて

初めての結成メンバーで、トップバッターとしてコンサートを盛り立てることができるのか緊張と不安が押し寄せました。しかしステージに上がると会場は京芸の結束感でしょうか、たくさんのお客様から溢れるような応援の拍手を頂き、平井さん、蒲生さんとともに温めてきた音楽を存分に表現し共有することができました。

このような機会を与えて下さったことに心から御礼申し上げます。

名畑ゆかり

同じ時間を共有できて

ブリリアント・コンサート第十回記念演奏会に出演させて頂き有難うございました。久しぶりに大村会長はじめ不変不動の信念で真声会大阪支部を支えてこられた諸先生方にお会いし、その情熱に感銘致しました。その気持ちに応えるかのようにほぼ満席の会場の中、出演者の方々は素晴らしい演奏をされました。私も同じ舞台上で皆さんと同じ時間を共有させていただき、心に残る良い思い出を作る事が出来ました。本当に有難うございました。

大阪支部の益々のご発展をお祈りいたします。 平井 好子

憧れの舞台にたて

憧れだった舞台からの眺めは、きらびやかで美しく、その場に立っている自分の幸せを実感しました。最年少参加だったので、大変緊張していて、先輩方の足を引っ張らないよう、精一杯演奏しました。広いホールで多彩な音を響かせるのに苦労しましたが、とてもいい勉強になりました。終了後、先輩方が大変優しく労って下さり、京芸生で良かったと誇りに思い、また更に頑張ろうと刺激を受けました。関係者各位に深く感謝致します。 岩井 理沙

みんなで目標を一つに

「いずみホールでコンサートが出来るといいね」から始まった第10回記念コンサート。『素晴らしいホールで、たくさんの方に、いい演奏を聴いていただく』を目指して全員が頑張ったと思います。そして当日、客席はたくさんのご来場者で埋まり、京芸らしい和やかで素晴らしいコンサートになったと思います。京芸同窓という心の絆がホール中に満ちる中で演奏させていただいて本当に幸せでした。ありがとうございました。 柴田千恵子

刺激的な一日でした

この度は10回記念のブリリアントコンサートに出演させていただきまして、感謝の気持ちでいっぱいです。

いずみホールという素晴らしいホールで、多くの方々の前で演奏させていただけたこと、森池さんと一緒に演奏させていただけたこと、普段なかなか接することのない多くの諸先輩方と一緒にさせていただけたこと、全てが刺激的な1日となりました。

この経験を糧に、今後も精進していきたいと思っています。

樋上 眞生

大阪支部の脈々としたつながりが

先輩方の味わい深い演奏には感銘を受け、後輩たちのフレッシュな演奏にはひたすら感心し、同世代の方々との久々の再会には思わ

ず心躍った一日でした。

そして何より、コンサート実現まで導いて下さった役員の皆様、当日も隅々までご配慮の行き届いた暖かいサポートを頂き、心よりお礼申し上げます。かくして今日というコンサートが存在し、この様にして真声会大阪支部は脈々とつながっているのだという事を、舞台袖で待機していた時、そして打ち上げの際、皆さんのお言葉を伺いながらひしひし感じておりました。本当に有難うございました。

大岡真紀子

歌い終わって・・・

作曲家はいい詩に出会った時、曲が自然に生まれるとの事。歌い手は歌いたいと思った曲に出会った時、自然に歌い始めます。

今回の演奏会で私が選んだ曲は谷川俊太郎氏の詩に高山惇さんが作曲した歌曲「じゅうにつき」の中からの5曲です。実は「この演奏会を最後に歌う事を止めよう!」と、心に決めての出演でした。しかし、一緒に出演した方々の音楽への熱い情熱を感じたり、演奏会をやるにあたり煩わしい沢山の仕事を引き受け、実現に尽力下さった方々のご厚意に接したり、そして、高山さんの作品の素晴らしさを理解し伴奏を引き受けて下さった樋上さんの伴奏で演奏した後、今まで動かなかった心が、不思議な事に、もっといい演奏をしたいと動き始めていたのです。今後、どこまでできるか解りませんが、今回、出演させて頂き、良かったと感謝しています。本当にありがとうございます。

森池日佐子

お客様に好評いただいて

今回のブリリアントコンサートは、プログラムが多彩でご来場のお客様には大変好評でした。自身の出来は反省ばかりでしたが、何度経験を重ねても次の課題が見つかり、改めて手強いものと思い知りました。そして音楽がより以上愛しく私の生活にはなくてはならない存在となりました。これからも自分のペースを守りながら目標を高く勉強したいと思いました。

お世話役の皆様、本当にありがとうございました。 中林 節子

感謝の気持ちを込めて

30期の私達4名(山口、小崎、清水、佐々)は、2012年8月、91歳と高齢ではありましたが、とてもお元気だった恩師のビンダー先生をドイツに訪ねました。オケに所属していたり、室内合奏団に在籍していた事があったり、大学で教鞭を取ったり、全くのフリーランスだったり…。こんな私達が長きに渡りプレイヤーでいられる事、そして、京芸を卒業して30年近く経とうとしている今でもこうやって仲良く演奏できる事、これは何物にも代えがたい私達の宝物です。

そんな私達のブリリアントコンサートへの出演は、大阪支部の世話役会の会議中に飛び出した何気ない推薦がきっかけでしたが、2013年2月、突然他界されたビンダー先生をも偲び、この感謝の気持ちを再認識する良い機会となりました。

第一バイオリンを弾いて下さった木村直子さんにも大きな感謝を捧げ、支えて下さった回りの皆様、会場のお客様、スタッフの皆様にも心から御礼を申し上げます。

小崎恵理子

(見出しの一部は、編集子が加筆)



大いに盛り上がった打ち上げ



皆様新年あけましておめでとうございます。新しい年も昨年が増した良き年でありますようお祈り申し上げます。

私達は昨夏4年間住んだアメリカのマサチューセッツ州ボストンを離れ、カナダのマニトバ州ウィニペグに引っ越してきました。カナダの中西部に位置するマニトバ州の州都であるウィニペグは、人口約70万人でカナダらしく多くの移民が住んでいます。フランス系、イタリア系、ウクライナ系、フィリピン系の移民に加えてネイティブカナディアンがそれぞれの地域を作って暮らしています。車で30分も走れば辺りは見渡す限りの平原、美しい自然に囲まれた所です

冬のウィニペグ市街



が、北米の都市では一番寒さの厳しい都市といわれ、真冬には体感温度がマイナス40度以下にもなることがあります。毎年10月から11月にかけて降る初雪は

溶けずに次の年の5月頃までそのまま残るので、1年のうち半分以上が雪と氷に覆われている計算になります。

そんな極寒の地ではありますが、人々は積極

的に外に出かけてウィンタースポーツやエンターテインメントを楽しんでいます。雪の為にイベントがキャンセルになる事はほぼありません。主人がレジデントコンダクターを務めるウィニペグ交響楽団も年間を通じて様々なコンサートを主催しています。子供の為のコンサートには3歳半になる娘も一緒に聴く事ができるようになり、娘の成長をととても嬉しく思います。

私は秋からシステム・ウィニペグという子供の為の音楽教育プログラムで教え始めました。日本でも有名なベネズエラのエル・システムをモデルにしたこのプログラムは市内でも貧困層の人々が住む地域の学校で、毎日放課後に3時間子供たちがオーケストラをはじめとした様々な音楽活動をするものです。様々な家庭の問題を抱えた子供たちも多くいますが、音楽とふれあうこの時間が、彼らにとって心安らぐ時間であるようにと願いながら毎回指導にあたっています。私自身が受けた音楽教育とは全くタイプの異なる教育の方法ですので、いろいろと勉強になる事が多く興味が尽きません。指導に行くと嬉しそうに飛びついてくる子供たちの成長ぶりを、これからも見守っていけたらと思います。ここウィニペグには3年ほどの滞在予定ですが、ここで色々な経験ができる事を楽しみにしています。



システムウィニペグの子供たち

ドイツでの5年間にわたる研鑽を終えた今、海外での様々な経験を通して、音楽だけではなく、文化を直接感じ、日本人としてのアイデンティティを意識することができた貴重な留学生活だったと感じる。ハンブルク音楽演劇大学大学院修士課程修了後、ハノーファー音楽演劇メディア大学にてドイツ国家演奏家資格取得過程に3年間在籍したが、それぞれ異なった2つの環境で過ごすことによって、より多くの事柄を学べたと思う。

ハンブルクでは大学院修了のため、講義を受け単位を取得する必要があった。特に、ドイツに来たばかりの1年目は来る日も来る日もドイツ語と悪戦苦闘していたが、それ以上に苦労したことは、日本人が私1人という状況の中で、外国人と一緒に受けなければいけない講義だった。日本では、生徒同士が議論し、プレゼンテーションを行う機会はあまりなかったのだが、それがほぼ毎回行われた。そのため、毎講義、最低限何かしらの発言をしなければならなかったのだが、経験が少なく、語学力に不安があるために、初めは勇気を振り絞っても周りの生徒の半分以下の量しか発言することができなかった。毎講義、いつも憂鬱な気持ちで臨んでいたが、半年経ち、少し余裕が生まれ始め、周りの発言を冷静に聞けるようになってからは、あることに気付くことが出来た。それは、発言することは、自分の意見を言うことであって、必ずしも正しい



答えを求められていないということだ。正解やより多くの知識を得るために講義を受けているのだから、間違ふことは問題ではなく、他の生徒と違う意見を持っていて当たり前であり、意見を言わないことは、自分自身の考えが何もないというように受け取られてしまう。そのことに、やっと気付くことができた。それは音楽においても、同じことが言えると思う。自分が音楽をどのように奏でたいのか、または音楽を通して何を表現したいのか。はっきりとした考えを持っていたら、先生と同じ意見にならなくとも、その理由を自分で探していくうちに、先生の発言の真意を理解し、より良い音楽に対してのアプローチの仕方を発見できる。そのように感じ、以前より

5年前、イモラ国際音楽院受験のため、イタリアに渡った。学校はスフォルツェスカ城を使用し、世界から大勢の若いピアニスト達が受験に来る。合格枠が狭いと聞き、ドイツの音大も受験し、結果、イタリ、ドイツ、ニカ国Wスクールが始まった。



スペイン・バルセロナでの演奏会

留学一年目、ドイツへの帰路、猛吹雪に逢い、深夜、スイスの知らない駅で降ろされた。ホテルも無く、凍える駅で野宿を決めた時、乗客の一人に声を掛けられ、疑心暗鬼でお宅にお邪魔したところ、なんと彼女はジュネーブ音楽院出身のチェリストだった。心身共に疲弊していたが、朝まで共奏したことは私の大切な思い出となった。

二年目、夜行列車を経験した。私は、鞆を抱きしめて横になったが、熟睡できず、ふと目を開けると、暗闇から大きな白目が光った。真向かいの黒人男性が、私を凝視していたのだ。息が止まった。翌朝、イタリア人の車掌さんが、疲れた私にくれた、苦いコーヒーと冷たいマフィンは一生涯忘れられない優しい味だった。



恩師ペトルジャンスキー氏に
甚平をプレゼント

色々な悲喜交々の体験と共に、ドイツの音大を卒業し、イモラの学生寮に移住を始めた。手続のため、イタリア警察に出頭した時、日本人最員の警察官達に、時計の修理

留学の地から

岩井 理沙
(53期 pf)

を頼まれた。メカに強い私は、ドライバーで簡単に直した。皆に賞賛され、署長らしき人から修理代まで頂いた。この驚きの体験を初め、以後人々との温かい交流が続いているのは、語学力と、日本人、そして音楽家であることの恩恵であると思う。



学長のウラディミール・アシュケナージ氏らと

現在、国内外で演奏会も増え、充実しているが、楽しい事ばかりではない。-10度～48度の気候に耐え、鉄道やライフライン事情は劣悪である。寮では、自由で超独創的な音楽家達が日々衝突している。

レッスンでは、ハイレベルな技量を求められ苦勞するが、尊敬する師匠と、刺激を受け合える友人達に囲まれた毎日を遅く有意義に過ごせること、日本から支えてくれる家族にも感謝し、少しでも社会に音楽で還元できるよう、更に精進していきたい。

音楽に対してより強く探究心を持てるようになったと思う。

ハノーファーでは、ハンブルクとは違い、一切講義がなかったため、ヨーロッパ各地の国際コンクールに挑戦した。もちろん、コンクールを通して、演奏技術を研磨することができたが、それ以上に海外の参加者と交流できたことが、私にとって大切な経験となった。コンクール期間中、海水浴などをしてオンとオフの切り替えを上手に行っているのを見習ったり、夜は郷土料理を囲みながら遅くまで語る機会がたくさんあった。そのときに、よく話題にのぼるのが、自国についてなのだが、話すことによって、日本の良いところ、そして自分がまだまだ知らない点を改めて認識することができ、また同時に、海外では自分の振る舞いが、外国人の日本人に対する印象に影響する場面があることを実感した。日本を離れて、より一層日本人であることを意識するようになったと思う。幸い、日本に完全帰国する年にイタリアのターラントで開催された第51回国際ピアノコンクール Concorso Pianistico Internazionale "Arcangelo Speranza" というコンクールで2位を受賞することができたのだが、私にとっては、3ラウンドある中で2次にベートーベンのピアノソナタ《ハンマークラヴィーア》を演奏できたことが、賞以上に嬉しく感じた。留学前は理解できないだろうと諦めていたベートーベンの大曲を私なりに理解し、表現したことが聴いている

人に伝わったと感じた瞬間、言葉には表すことが難しいが、とにかく留学してよかったと心から思うことができた。大げさかもしれないが、留学して色々な経験があってこそ自分の音楽の存在意義を感じることができた瞬間だった。ベートーベンのピアノソナタ《ハンマークラヴィーア》は、ハノーファーの卒業試験や海外の音楽祭でも演奏したが、毎回演奏する度にたくさんの発見がある。一生かかっても本当の意味で理解することは難しいと思うが、人生の経験に比例して曲との距離も近くなると信じ、海外で得た経験を生かして、これから社会に貢献できるよう、日本で活動していきたいと思う。



ハノーファー音楽演劇メディア大学在学中に師事したマルクス・グロー教授 (Prof. Markus Groh) と国際ピアノアカデミー Lüneburger Heide で。

インフォメーション INFORMATION

♪上敷領美絵・藍子デュオリサイタル

3月1日(土) 12:00 / カワイ梅田コンサートサロン“ジュエ” (大阪駅前第3ビル1F)

- *上敷領美絵 (48期 pf)、妹・藍子 (vn)
- *バッハ=ブラームス: 無伴奏ヴァイオリンパルティータ 第2番より「シャコンヌ」(左手によるピアノソロ)、ベートーヴェン: ヴァイオリン・ソナタ 第8番ト長調 作品30-3、スクリャーピン: 左手のための2つの小品 作品9「前奏曲」「夜想曲」、ラヴェル: ヴァイオリンとピアノのためのソナタト長調、ウイエニアフスキ: ファウストの主題による幻想曲 作品20
- *2,000円 (学生 1,000円)
- *電話: 072-831-2498
- *真声会大阪支部後援

♪クラリネット、コントラバス、ピアノの愉快なトリオ

3月29日(土) 15:00 / ヒビキミュージックサロン リーブス (北区西天満 3-1-6 辰野西天満ビル 1F)

- *西川香代 (45期 cl)、平田昭浩 (42期 cb)、山田利恵 (41期 pf)
- *ポツテジーニ: クラリネットとコントラバスのためのグランデュオ、ベートーヴェン: クラリネットとファゴットのための3つの二重奏曲 WoO.27 より第3番、ハウタ=アホ: Mikkos' Menuet、シュライナー: クラリネットとピアノのための「インマー・クライナー」、ブルッフ: クラリネット、ヴィオラとピアノのための8つの小品 op.83
- *前売 2,500円 (当日 3,000円)
- *電話: 06-6363-3060
- *真声会大阪支部後援

♪部 幾世子、水野雅子ジョイントリサイタル vol.2

3月29日(土) 17:00 / 兵庫県立芸術文化センター小ホール

- *部 幾世子 (30期 pf)、水野雅子 (26期 pf)
- *キュイ: 前奏曲 op.64-10、ラフマニノフ: 愛の悲しみ (クライスラー)、プロコフィエフ: バレエ音楽「ロミオとジュリエット」からの10の小品より“モンターギュー家とキャピュレット家”ほか、アルチュニアン&パバジャニアン: アルメニア狂詩曲、ポロディン(ポーブ編曲): 「イーゴリ公」より“だったん人の踊り”ほか
- *3,000円 (3歳以上入場可)
- *電話: 0797-57-2066 (株式会社イーブンイフ)

♪ピアノ連弾フェスタ at 京都芸術センター

4月6日(日) 14:00 / 京都芸術センター講堂

- *if piano duo 岩崎宇紀 (27期)、藤島啓子
- *カプースチン: “マンテカ”によるパラフレーズ ほか
- *出演者は要参加料 参加申し込み2月1日締切予定
- *入場無料
- *tel&fax: 075-882-4358 (藤島)
- mail: ifpianoduo@yahoo.co.jp

「真声会大阪」が100号です！

真声会大阪支部の支部報「真声会大阪」が、めでたく、ここに第100号を迎えました。大阪支部は、1960年7月3日に発足していますが、世話人を欠き、3年ほどで立ち消えとなりました。その後、真声会創立30周年を契機として、1985年3月31日、123名でもって再発足(翌年3月、エル・おおさか大ホールでの設立記念演奏会とパーティーは熱気に満ちていました)し、その6月1日に支部報第1号が発行され、そこから数えて100号です。

当初、安川温子さん(18期、作曲)のご尽力で、なんと、手書き・手作りでも隔月に発行されています。実に力強い機関紙でした。93年春まで続けられましたが、50号(93年8月25日発行)を契機に活字印刷となり、安川さんの手から離れました。

52号から現在の形になりましたが、年間発行回数も2~4回に減り、今日に至っています。

来年は真声会誕生60年、大阪支部発足当時のあの熱気ある支部報の雰囲気を取り戻したいものです。

出でよ! 新しい、若いエネルギー!

今号は、「ブリリアント・コンサート 2013」の報告が中心になりましたが、あの熱気を紙面で伝えるのは難しいなあ。ホームページにも載せてもらいます。年頭の辞として、大村さんが、文化の視点で世界を、日本を眺め、これからに向けて提言してくださっています。音楽教育(専門家の育成も含めて)のあり方については、もっといろいろとご提言がありがたいと思いますが、次の機会にお願いすることとしましょう。また、三人の方が、海外での体験、そして“いま”を綴ってくださいました。とても素敵ですね。

お互いに、今年もがんばりましょう!

この欄への情報の提供、エッセイ、留学記など、なんでも結構です。皆さんで紙面を盛り立ててください。投稿をお待ちしています。表紙記載の事務局か、メールは、kshige39@r2.dion.ne.jp へ。

(編集者)